

令和 8 年 1 月 3 0 日	病 害 虫 発 生 予 報 2 月 号	茨城県病害虫防除所
---------------------	------------------------	-----------

農薬危害防止と効果安定のために 土壌くん蒸剤の施用後は、しっかり被覆しましょう。

< 目 次 >

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
イチゴ：アザミウマ類、ハダニ類・・・・・・・・・・・・・・・・	1
促成ピーマン：うどんこ病・・・・・・・・・・・・・・・・	2
促成トマト：黄化葉巻病（タバココナジラミ）・・・・・・・・	2
促成キュウリ：うどんこ病、べと病・・・・・・・・・・・・・・・・	3
【その他の病害虫】	
イチゴ、促成ピーマン、促成トマト、促成キュウリ・・・・・・・・	4
【防除所レポート】	
令和 7 年の水稻における斑点米カメムシ類と斑点米の発生状況・・・・・・・・	5
○サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期）・・・・・・・・	6
II. 今月の気象予報・・・・・・・・・・・・・・・・	7
<p>最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの 「農薬登録情報提供システム」（https://pesticide.maff.go.jp/）で確認することができます。</p>	
<p>詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。Tel :0299-45-8200 ホームページでは病害虫・フェロモントラップ・農薬関連情報がご覧いただけます。 https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/</p> <p>※病害虫の発生状況や、適切な防除方法は地域により異なる可能性があります。病害虫の防除や 農薬についてのご相談は、お住まいの都道府県にある病害虫防除所等の指導機関にお問い合わせ ください。</p>	



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. アザミウマ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 1月下旬現在、寄生花率（本年値 0.8%、過去9年平均値 0.9%）、発生地点率（本年値 30%、過去9年平均値 12%）ともに本年を含む過去10年中3番目に高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① アザミウマ類は増殖が速いので、花をよく観察し、発生の少ないうちに防除を徹底する。
② 青色粘着トラップを10aあたり100～400枚設置すると密度低減に有効である。
③ 薬剤散布は、アザミウマ類の寄生部位である花にかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
④ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

2. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 1月下旬現在、寄生葉率（本年値 28.1%、平年値 17.5%）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 60%、平年値 66%）は平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速く、多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
② 天敵導入圃場では、ハダニ類や天敵の生息状況等をよく観察し、必要に応じて天敵の追加放飼を検討する。
③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
④ ミツバチや天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

（令和7年12月23日発表 病害虫速報 No.7 参照）

促成ピーマン

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	やや多い	鹿行地域

[予報の根拠]

- ① 1月下旬現在、発病度※（本年値 5.0、平年値 2.1）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 50%、平年値 48%）は平年並である。

※発病度：株ごとの発病程度をもとに算出した数値、最小値は 0 で最大値は 100 となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ② 罹病部は新たな伝染源となるため、できるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

促成トマト

1. 黄化葉巻病（タバココナジラミ）

[予報内容]

発生時期	発 生 量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 1月下旬現在、発病株率（本年値 2.5%、平年値 0.3%）は平年より高く、発生地点率（本年値 33%、平年値 9%）は平年よりやや高い。
- ② 1月下旬現在、一部圃場においてタバココナジラミ成虫の発生を認めている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病株は伝染源となるため、速やかに抜き取り、適切に処分する。
- ② タバココナジラミは多発すると防除が困難となるため、発生の少ないうちに防除を徹底する。
- ③ 媒介虫であるタバココナジラミの施設内への侵入および施設外への飛び出しを防ぐため、開口部に 0.4mm 目合い以下の防虫ネットを設置する。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- ④ 黄色粘着板や黄色粘着テープを施設内や周辺部に設置し、タバココナジラミ成虫を捕殺する。
- ⑤ 雑草はタバココナジラミの生息場所となるため、ハウス内外の除草を徹底する。
- ⑥ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、気門封鎖剤以外については、タバココナジラミの薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ⑦ 黄化葉巻病耐病性品種は、ウイルスに感染しても発病は抑制されるが、感染株は本病の伝染源になるため、タバココナジラミの防除は感受性品種と同様に行う。

促成キュウリ

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 1月下旬現在、発病葉率（本年値 1.5%、平年値 1.1%）、発生地点率（本年値 20%、平年値 18%）ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
- ② 罹病部は新たな伝染源となるため、できるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

2. ベと病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 1月下旬現在、発病葉率（本年値 1.5%、平年値 1.3%）、発生地点率（本年値 20%、平年値 10%）ともに平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。また、株の勢いが衰えると、発生が増加する傾向にあるため草勢の維持に努める。
- ② 多湿条件で発生しやすいため、暖房、送風、換気等によりハウス内の湿度を低く保つ。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、薬剤感受性の低下を防ぐため、FRAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 天敵を使用している場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況および注意すべき事項
イチゴ	うどんこ病	発生量：平年並 ～やや多い	1月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
促成ピーマン	アザミウマ類	発生量：やや少ない	1月下旬現在、平年よりやや少ない発生である。
促成トマト	黄化病	発生量：平年並 ～やや多い	1月下旬現在、平年並～やや多い発生である。媒介虫であるコナジラミ類の防除を徹底する。
	灰色かび病		1月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
促成キュウリ	褐斑病	発生量：やや多い	1月下旬現在、平年よりやや多い発生である。

令和7年の水稻における斑点米カメムシ類と斑点米の発生状況

水稻巡回調査圃場での斑点米カメムシ類(以下、カメムシ類)のすくい取り調査および普及センターの水稻定点調査圃場の調査米(以下、定点調査米)の斑点米等発生調査の結果をもとに、令和7年の水稻におけるカメムシ類と斑点米の発生状況についてまとめましたので、次作の参考にしてください。

〔調査方法および結果の概要〕

1. カメムシ類の発生状況調査(すくい取り調査)

巡回調査圃場57地点について、7月上旬～8月下旬まで調査した結果、7月上旬、7月下旬は斑点米カメムシ類の虫数は平年よりやや多い～多かったが、8月上旬、8月下旬は平年並であった。調査期間中、すくい取り虫数が最も多かったのは7月下旬で、種別にみるとイネカメムシが最も多く、また、県内全域で発生を確認した。7月上旬、8月上旬および8月下旬はクモヘリカメムシが最も多かった。

(令和7年9月30日発表 病虫害発生予報10月号p9-10防除所レポート参照)

2. 斑点米等の発生状況調査

定点調査米37点について、斑点米等の発生粒数を被害部位・種類別に調査した結果、精玄米1,000粒あたりの斑点米等の発生粒数は全県平均2.7粒で、過去11年中1位であった(図)。被害部位別では基部が49%と最も多く、次いで側部42%、頂部5%であった。地域別にみると、県北、鹿行および県南では側部(各41%、68%、56%)、県央および県西では基部(各63%、69%)が多かった(表)。

表 普及センター水稻定点調査圃場における斑点米等発生状況

地域〔圃場数〕	被害部位・種類における発生粒数(粒/精玄米1,000粒) ¹⁾				合計
	基 部	側 部 ²⁾	頂 部	カメムシ黒点米 ³⁾	
県北〔4〕	0.5 (24%)	1.4 (41%) ⁴⁾	0.0 (0%)	0.1 (5%)	1.9
県央〔6〕	1.5 (63%)	0.6 (25%)	0.2 (7%)	0.1 (6%)	2.4
鹿行〔6〕	0.9 (23%)	2.6 (68%)	0.2 (4%)	0.2 (5%)	3.8
県南〔10〕	0.4 (29%)	0.7 (56%)	0.1 (10%)	0.0 (5%)	1.2
県西〔11〕	2.6 (69%)	0.9 (23%)	0.2 (5%)	0.1 (2%)	3.7
全県〔37〕	1.3 (49%)	1.1 (42%)	0.1 (5%)	0.1 (4%)	2.7

1) 数値は四捨五入しており、部位・種類別の計と合計が一致しないことがある。

2) 背部、腹部を含む。

3) 頂部被害とくさび状の裂開がみられるもの。

4) () 内の数値は部位・種類別の割合を示す。



基部被害

〔考察〕

斑点米カメムシ類が米を加害する部位は、クモヘリカメムシが側部、イネカメムシが基部、アカスジカスミカメは頂部であることが多いとされている。これに基づいてカメムシ類の加害種を地域別に推測すると、県北、鹿行および県南ではクモヘリカメムシ、県央および県西ではイネカメムシが優占していると考えられた。

県全体でみると、クモヘリカメムシとイネカメムシが優占しており、これらのカメムシ類は出穂期に稲を加害することで不稔を発生させ、減収の原因となることが知られている。圃場内のカメムシ類の種類を確認し、適期防除を行うことが重要である。

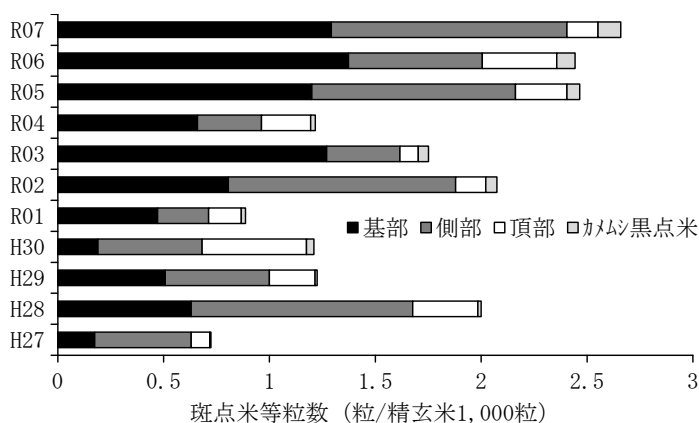


図 普及センター水稻定点調査圃場における斑点米等発生状況の年次推移

サツマイモ基腐病の防除対策（育苗期）

基腐病対策の第一歩は健全苗の確保から

○基腐病対策の基本は、圃場に病原菌を持ち込まないことです。

○圃場に感染苗を持ち込んでしまうと、その後、圃場でいろいろな対策を行っても、十分な効果は得られません。

【育苗にあたっての注意点】

■健全な種いも・苗の使用を徹底しましょう！ ← 健全な苗床で健全な苗を作る

- ・ 苗を増殖する場合は、ウイルスフリー苗を用いる。
- ・ 種いもから苗を増殖する場合は、病気が発生していない圃場で作られた健全な
いもを選び、伏せ込む前に種いもを消毒する。
- ・ 来歴が不明な種いもや切苗は絶対に使用しない。
- ・ 多発地域からは、種いもや切苗を持ち込まない。
- ・ 生産者間で種いもや切苗の譲渡等を行わない。
- ・ 基腐病が発生した圃場からは、種いもを絶対に採取しない。

発生圃場から収穫したいもを種いもに使用すると、育苗中に発病します。

種いもの生産圃場で病気の発生が無いことを確認しておきましょう。

■育苗中は苗床をよく観察しましょう！ ← 発病株の早期発見

基腐病の発生が疑われる場合は、速やかに普及センターへ連絡してください。

葉巻、株の萎縮、葉の変色やしおれ、苗基部の黒変

※苗床に病気が広がらないよう、発病株を含む周囲の株を抜き取り、圃場外に持ち出し処分する必要があります。

茨城県総合防除計画におけるサツマイモ基腐病の遵守事項

茨城県では、全国的に発生しているサツマイモ基腐病について、すべての農業者（家庭菜園を含む）の皆様にご守っていただくルール（遵守事項）を定めました（令和5年4月1日に施行された改正植物防疫法に基づくものです）。

○遵守すべき事項

- ・ 県が実施するまん延防止のための調査に協力する。
- ・ 本病の発生を確認した場合には、関係機関へ連絡し、関係機関の指導の下、発病株を抜き取り、圃場（苗床を含む）外に持ち出す。
- ・ 本病発生圃場では、2年間、サツマイモを作付けしない（関係機関の指導の下、栽培管理する場合を除く）。
- ・ 本病発生圃場から種イモを採取しない。
- ・ 本病発生圃場では、発生の拡大が無いことを確認する。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 1 月 31 日から 2 月 28 日)

気象庁 (1 月 29 日 発表)

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	関東甲信全域	30	40	30
降水量	関東甲信全域	60	30	10
日照時間	関東甲信全域	10	30	60

[概要]

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

< 1 週目の予報 > 1 月 31 日 (土曜日) から 2 月 6 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 50%

< 2 週目の予報 > 2 月 7 日 (土曜日) から 2 月 13 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 50%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 2 月 14 日 (土曜日) から 2 月 27 日 (金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散（ドリフト）しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類（FRAC コード、IRAC コード）の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。